

## はじめに

住田古瓦・考古学研究支援委員会

前委員長 須田 勉

二〇二二年は、武蔵国分寺跡史跡指定一〇〇周年の記念すべき年でありました。国分寺市はこの記念すべき年にあたり、十月二十二日に第一回目の「国分寺の伽藍と武蔵国分寺」をテーマとして、発掘調査が進んでいる相模国分寺・上総国分寺・下野国分寺などの事例を含めてシンポジウムを開催し、これまでにおける長年にわたる発掘調査の成果について「遺構」を中心に議論を展開いたしました。

二〇二二年はそれに加え、武蔵国分寺や古瓦研究に多大な貢献をされた住田正二先生生誕一〇〇周年と「住田古瓦考古学奨励賞」の選考を柱の一つとする住田古瓦・考古学研究支援委員会の創設一〇周年の節目にあたる記念すべき年でもありました。この慶賀の年に際し、十二月十一日に国分寺市教育委員会と住田古瓦・考古学研究支援委員会との共催による「武蔵国分寺の造営と文字瓦」をテーマとする第二回目のシンポジウムを開催し、文字瓦がもつ造営上の意義を中心に論じることができました。

武蔵国分寺跡は江戸や都心の近郊にあり、そこには巨大な礎石が残され、膨大な量の瓦や文字瓦が出土することから、江戸時代から文人・墨客などにより多くの関心が寄せられてきました。斎藤鶴磯の『武蔵野話』や植田孟縉によ

る『武蔵名勝図会』などがあり、すでに互に記された文字瓦の解明に興味の中心がありました。明治時代以降は、篠原市之助・高橋健自・住田正一・平塚運一・後藤守一氏などによる資料収集や研究が相次ぎ、武蔵国分寺出土瓦を歴史資料としての科学的研究へと進展させました。

戦後は、一九五六・一九五八年(昭和三十一年・三十二年)の日本考古学協会仏教遺跡特別委員会や一九六四～一九六九年(昭和三十九～四十四)には早稲田大学などによる伽藍中枢部や寺院地などの発掘調査が行われ、全国に先駆けて寺院地や伽藍地の解明などがなされました。一方、一九五八年(昭和三十三年)に大川清氏による『武蔵国分寺古瓦博文字考』、一九六〇年には石村喜英氏が『武蔵国分寺の研究』を出版されました。特に大川氏は、武蔵国分寺出土の豊島郡の文字瓦の記名方式が、正倉院の調庸関係墨書銘に類似することから、戸主に負担を求めた、いわば律令税制に基づく貢納形態を主張されました。その後、知識説や雑徭の援用説などの新説が出されるなど、諸国国分寺における造営過程を考えるうえで、つねに先駆的役割を果たしてきました。

諸国国分寺の造営過程を考えるうえで大切なことは、古代律令国家が考えた国分寺建立という国家的事業を、各国の在地社会がどのように受け止め、それをどのように実施に移したのかを政治的・社会的動向のなかで検証することであり、国分寺研究の多くは、その点にあるといっても過言ではないでしょう。本書を『国分寺造営と在地社会』としたゆえんであります。

二〇二四年四月吉日